

2008 年度 卒業論文 要約

氏名	卒業論文タイトル
淡路 麻里子	変わりゆく環境で生きる動物たち —野生動物との共生を目指して—
大西 智彦	日本の精神・風土から見る音楽の特徴—日本人の感性—
佐藤 真咲	「笑い」がもたらす自然治癒力
志智 薫	「いのち」の健康—農業体験を手がかりに—
鳥居 恵	心を育てる環境教育—ルソー『エミール』における教育観—
宮元 梨菜	自己を見つめ直す—豊かな人生を歩むために—
森 彩香	「いのち」の尊厳をめぐる—ケアの可能性を考える—
山縣 亜梨沙	動物園における環境教育の展開

変わりゆく環境で生きる動物たち

－野生動物との共生を目指して－

淡路 麻里子

<目次>

はじめに

第一章 環境の変化と野生動物の異変

第一節 野生動物と都市化

第二節 野生動物と温暖化

第三節 野生動物とグローバル化

第二章 野生動物の保護活動－動物園を中心に－

第一節 種の保全計画

第二節 環境教育の場として

第三節 野生復帰を目指す

第三章 野生動物への配慮と義務

第一節 動物倫理を見直す

第二節 人間中心主義から非人間中心主義へ

第三節 野生動物との共生を目指して

おわりに

<要約>

地球上のほとんどの生態系は、地球温暖化、森林伐採など、なんらかの人為の影響によって大きく損なわれている。生態系の破壊は、私たちの身の回りのあらゆるところで深刻化している。そのため、多くの野生動物たちは、種単位でその数を減らし、絶滅の危機に瀕している。絶滅の危機にある多くの動物たちが語るもの。それは、私たちが生きる、この地球という星の自然環境が、大きな脅威にさらされている、ということである。私たちはいま大量絶滅という事態を経験しつつあり、それは地球の歴史上かつてないスピードで広がっている。これは人間の生活の質だけでなく、存続をも脅かす深刻な問題である。

現在、開発や人間活動のあり方を調節し、「健全な生態系」の持続性を最優先させることの必要性が強く認識されるようになった。そのため、「生物多様性の保全」と「健全な生態系の持続」といった、二つの社会的目標を同時に追求することが必要であると考えられる。私たちは、現代の社会・経済・文化に適合したものであると同時に、野生動物の観点からも望ましい自然の姿を検討していくことが求められている。それは、人間を含めた、すべての動物たちが、自然のもつ完全性、優良性、寛大さを破壊しないように、調和をもって働くことである。私たちは、野生動物への配慮と義務を持ってこの問題に取り組むべきである。

日本の精神・風土から見る音楽の特徴

－日本人の感性－

大西 智彦

<目次>

はじめに

第一章 人間の音楽の捉え方

- 第一節 日本における音楽と楽器の歴史
- 第二節 音楽の捉え方 - 五感のどこから捉えるか -
- 第三節 曲調が与える影響 - 日本人の感性 -

第二章 言葉と音楽の相関性

- 第一節 日本の歌の特徴 - 四季の変化の観点から捉える -
- 第二節 わらべ歌から見る歌詞の影響力
- 第三節 言葉と音楽の相関性 - どちらの影響が強いのか -

第三章 日本の精神・風土から見る日本人の音楽の感性

- 第一節 日本人の短調感 - 日本の曲で短調が多いのはなぜか -
- 第二節 日本の精神・風土と日本音楽の関連
- 第三節 日本人の音楽の感性

終わりに

<要約>

現代の日本では様々なジャンルの音楽を耳にすることができる。そうした中でも日本音楽の特徴として挙げられるのが、日本の曲は短調が多いという点である。また、日本人は短調を「暗い」、「寂しい」などといういわばマイナスイメージに近い印象を抱く傾向がある。そこで、実際に短調は暗いのかどうかという点から曲調が与える影響、そして現代では切れない関係となった言葉と音楽の相関性に着目し、さらに日本人の精神性や日本の風土というものが、日本

音楽に対してどのような影響を与えるかという点について、この論文では述べていくものとする。

第一章では、日本における音楽の歴史から音楽の捉え方、曲調が与える影響について述べる。第二節では音楽は楽譜という視覚を用いる場合と聴くという聴覚を用いる場合の二つの可能性を持っているのだが、やはり初めは耳で聴いて音を取ることから音楽は出発するため、音楽は五感の中で聴覚を最も用いることが多いとわかった。日本人は短調を「暗い」などと捉えることが多いのだが、理論上では短調が暗いわけではないということが、第三節において明らかとなった。

第二章では歌詞を中心として、言葉がいかに音楽に影響するかという点に着目して論じていく。歌詞は視覚から捉えるため影響が強そうなのだが、実は音楽となると言葉が直接目に見えないため、言葉自体の影響力は決して強いものではない。しかし、第二節で述べるように、たとえばわらべ歌には道徳的な意味合いが含まれているものがある。これが歌詞となって視覚で捉えた際、やはり影響力が強いのは明らかである。しかし、訳詞をした際に長調（日本人としては明るく感じる調）の曲には原詞が暗い内容であっても、あえて比較的明るい内容に訳詞するなど、日本人は曲調に左右される傾向があるのが第三章でわかっている。

そこで第三章では、まず歴史的観点を背景に日本人の精神性が音楽にどのような影響を与えるのか、また日本の風土が音楽にどのような影響をもたらすのかに着目する。日本では古くから陰陽五行説を用いてきており、良し悪しをつけない思想が根付いている。しかし、後に江戸時代では庶民の生活では圧政に近い苦勞を強いられることになった。そうした苦勞が続く状態で明治期になって西洋音楽が到来し、そこで暗い内容の映画などに短調の曲を用いていることを知った日本人は「短調は暗い」ものと誤った認識を抱いてしまったのである。

そのような状況で現代の日本音楽は成立しているのだが、陰陽五行説の思想は今までの深く根付いている。それは西洋音楽と雅楽を元とする日本音楽の両方を受け入れている現代の状況からもわかることである。日本人の音楽に対する感性は、陰陽五行説の思想、歴史、風土という三点が複雑に絡み合い、築かれてきたものであるといえるだろう。日本では楽器のような出土品に対する研究というものが、まだ本格的に行われていない。現在、一部では楽器や音楽の考古学研究というものが始まっているため、これを機により深く、日本音楽の歴史から日本人の音楽の感性というものが解明されることを期待したい。

「笑い」がもたらす自然治癒力

佐藤真咲

<目次>

- 第1章 「笑い」とは
 - 第1節 「笑い」の分類
 - 第2節 ジャパニーズ・スマイルを見つめなおして
 - 第3節 「笑い」の治癒力
- 第2章 自然治癒力
 - 第1節 自然治癒力とは
 - 第2節 自然治癒力を高める
 - 第3節 なぜ自然治癒力が必要か
- 第3章 「笑い」と自然治癒力
 - 第1節 「笑い」と自然治癒力の関係
 - 第2節 「笑い」による自然治癒力の向上の実践例ー環境教育を通してー
 - 第3節 人生を豊かにする「笑い」と自然治癒力

<要約> 論者は、大学二回生から現在もなお、児童養護施設において不登校児への学習指導のボランティアを月に二回ほど行っている。このボランティア活動によって「笑い」は人間関係を築くにあたり、最高のコミュニケーション方法であると感じ、「笑い」をテーマに論文を書いてみたいと考えた。そして「笑い」について調べている過程において、「笑い」と生の源である自然治癒力には深い関係があることを知った。この論文では、「笑い」と、自然治癒力がどのような関係を持ち、人生においてどれほど大切であるかについて述べている。第1章では、「笑い」とは一体どのようなものであるか、「笑い」の種類によって人間の心身に与える影響は変化してくるのか、また、笑いの治癒力について述べていく。第2章では、まず自然治癒力について定義し、自然治癒力の高め方、必要性について述べる。そして第3章では、「笑い」が自然治癒力を高めるためにどのように関係しているかということ、論者自身の環境教育での体験を踏まえながら述べ、「笑い」と自然治癒力が人生・生命にお

いていかに大切かということを結論付けていく。

論者は、大学3回生と4回生の二年にわたって、環境教育に携わってきた。主な内容は、甲南大学環境教育野外施設（広野）の畑・田んぼにおいて一年間かけて食物を育てていくということである。最初のころはやはり、未経験で慣れていなかったこともあり「大変だ」という気持ちが一番大きかった。しかし、「大変だ」という気持ちはだんだんと「楽しさ」や「うれしさ」、「喜び」に変化してきた。論者は、成長していく食物を見て笑顔になることで、生への感謝の気持ちが強くなり、「自分も悔いなく精一杯生きていかなければ」という意欲が湧いてきた。そしてさらに、畑や田んぼで仲間たちと笑い合いながら作業を行なうことでは、多くの人々に支えられていることを実感し、作業後の疲労感を心地良いと感じることができ、体力がつくようになってきた。「今日もこれだけ頑張った証拠である。いのちや仲間と触れ合った証拠である」と考えることができるようになったからである。論者はこれらの環境教育の体験から、人間が本来持っている生命体のリズムや心のあり方について考えることができた。笑うことで食物・生への感謝や、仲間への信頼や愛情が芽生え、生きる意欲や体力の向上といった生命エネルギーが高まっていったのである。

人間には本来「自然治癒力」という外界からの多種多様な刺激（傷や免疫）に順応するための生理的・心理的機能が備わっている。その機能を活かすために最も重要なことは、自分のこころを強く保ち、自己受容を行なうことなのである。たとえネガティブな出来事が起こったとしても、決して悲観的にならずに、そのときの良いところ・悪いところ全て含めたありのままの自分を受け入れることで自然治癒力は高まるのである。そして、その自然治癒力は「笑い」によってもたらされる。笑うことで楽しさや喜び、信頼や愛情といった生きることに対して積極的な情緒が生まれる。さらに、積極的情緒は人生において自信や希望へとつながる。最後にそれらの希望が自己受容へと導いていくのである。このように考えると、「笑い」と自然治癒力は常に循環しており、深い関わりを持っていることが分かる。しかし、この循環が上手く機能するかどうかは、生や生きることに対しての気持ち・取り組み次第なのである。生きることにに対して前向きな人間であれば、辛いことが起こったとしても笑顔でいることのできる強さを持っており、笑うことの幸せを実感できる。そしてその結果、生命エネルギーは活性化され自然治癒力は高まるのである。人間は生まれつき自然治癒力という素晴らしい力を持っているのだから、その力を十分に発揮するため、笑顔で愛情や喜びに満ち溢れた毎日を過ごしたい。生きていくこと、自分を支えてくれている人に感謝できる人間でありたいと考えている。

「いのち」の健康—農業体験を手がかりに—

志智 薫

<目次>

はじめに

第一章 現代の食環境

- 第一節 食環境の現状把握
- 第二節 失われた食文化
- 第三節 現代人の健康をめぐる

第二章 内なる力—自然治癒力—

- 第一節 自然治癒力とは
- 第二節 心身の健康のために
- 第三節 治癒が起こりやすい食生活

第三章 「いのち」の健康—農業体験を手がかりに—

- 第一節 農業と教育—米づくりが人を育てる—
- 第二節 環境教育の場での食
- 第三節 環境教育から考える「いのち」

おわりに

<要約>

現在は、食と健康についての言説は健康雑誌やテレビの健康番組をあげるまでもなく多彩である。最近健康という言葉に敏感であり、健康に切り離せない食についてはたくさんの方が興味を持っている。また、食をめぐる様々な問題があり、その一つである食品偽造問題の背景には食が多用化し、そこから加工食品が増えたことが繋がっているように思われる。

近年、日本では加工食品が増え簡単にコンビニやスーパーなどで食品が手に入り、食の多様性や効便性は確かに上がった。しかし、現在は食が簡単に手に入り溢れる世の中で食事が単調となり、食への有り難さが軽視されているように思う。私は農業体験を通して、私たちの食卓に出てくる食事にはそこに至るまでに、その食品の素材自体を育ててくれた農家の人、またその食品を調理してくれる人など様々な人の手間が込められ私たちの前に出てきているということ学んだ。そしてそれを知ることで、食への有り難さをこころから感じる事ができた。そういった体験をふまえ、つくられる食への価値観、食は体だけでなくこころにも大きな影響を与えるという視点に立って、現代の食の問題を理解した上で、食をめぐるいのちの健康について考える。

第一章で現在の食環境を把握し、現代人の食生活と、それをとりまく健康について論じる。第二章では、心身の健康を考える上で重要な役割を果たす自然治癒力について論じ、治癒が起こりやすい食生活について論じる。第三章では、実際に農業体験を通して、つくられる食への価値観、自らが体験することの大切さを述べる。

農業体験を通して自然に触れることで、いのちについて考えるようになった。いのちの健康はとても難しい課題だ。なぜなら、いのちの健康のための最善の方法などはなく、必ずしも答えは一つではないし、状況によりその答えも変わってくるからだ。しかし、いのちを健康にするためには、まずは自分のいのちを大切に思うこと、大切にすることが重要であると感じた。いのちを大切に思う心が自らのいのちを支える食であったり、体であったりを大切にしていこうという考えに繋がり、その思いが健康な体に繋がっていくからである。私自身、いのちについて考えたきっかけは農業体験であった。農業体験を通じて、実際に自らが様々ないのちに触れ、いのちのかけがえのなさ、力強さを感じ、いのちの大切さをこころから感じた。そのため、様々ないのちと接する場を体験することは重要であると考えている。

心を育てる環境教育

―ルソー『エミール』における教育観―

鳥居 恵

<目次>

はじめに

第一章 日本の農業と環境教育

- 第一節 日本の農業
- 第二節 日本の環境教育
- 第三節 環境教育活動を通じて

第二章 ルソー『エミール』から学ぶ教育観

- 第一節 ルソーの教育観
- 第二節 『エミール』と環境
- 第三節 心の豊かさ

第三章 環境教育におけるこれからの取り組み

- 第一節 心を育てる環境教育
- 第二節 環境教育の実践
- 第三節 環境教育ネットワークの拡大

おわりに

<要約>

2年間のゼミ活動において、実際に無農薬の米・野菜をつくる活動をサポートするという立場で、環境教育活動の場に参加することができた。直接自然と触れ合う体験を重ねるごとに、自然の厳しさや、生きることに対する喜びというものを強く感じるようになっていった。そしてこの体験活動において、自然の動きを感じることで自分自身を見つめることができると感じるようになっていった。

この論文では、人間の成長に大きく関わるとされる環境教育活動について

考えてみたい。ルソーの『エミール』における教育観を考察することにより、自然と人間の成長とを結び付けていく。最終的に自分自身または将来自分の子どもたちを育てていくにあたって、今後どのような環境教育を行っていくことができるだろうかということについて考えていきたい。

第一章では、我々が住む日本の伝統的な農業をヒントにしなが、近代化以前の日本の環境と現代の環境を見比べて、環境教育についての考え方を明確にしていく。第二章では、ルソーの『エミール』を手がかりにして、ルソーの目指した教育というものを探っていくことにより、現代の私たちに必要な教育について明らかにしていく。そして第三章では、今後実際に環境教育活動を実践していくために、どのような環境教育を行っていくことができるのであろうかということについて考えていく。

今や様々な企業や団体などが、環境問題解決のため、目標を掲げ、活動に取り組んでいる。そして、今や“エコ”という言葉は時代を象徴するキーワードとなっている。多くの人々の努力によって、多くの人たちが環境問題と日々真剣に向き合っている。しかし、暮らし単位、生活単位で考えたとき、やはりまだ、人々の意識は十分なものであるとはいえないであろう。人々の生活の中に、循環できることを考えるというスタイルを広めていくには、最終的に「自己成長と環境活動を結び付けて考えていくこと」が大切ということになるであろうと思う。教育に関しても、自ら積極的に心をつくっていかうとする主体的な姿勢を持ち続けることが必要である。

ルソーは『エミール』を通じて、どんなに厳しい環境においても、そこで生きることを選び、そして、生きるために必要なものを認識するということの大切さを、現代を生きる私たちに示してくれる。私たちの生活において、自分自身の必要な量をわきまえた上で、主体性をもって思考し行動するということが大切であろう。

心の豊かさを得られる生活を目指し、環境教育活動をより充実させていきたい。この活動によって失いかけていた人と人とのつながりの輪、循環型社会の体系を再度構築していけたらよいと思う。

今、何もかもが便利になっている生活の場において、自分から体を動かすことに喜びを感じる、昔の温かい生活を選んでいくことは、現代の喜びとはまたちがう自分自身の満足感となるであろう。自分に必要なものを最小限にし、自分とともに生活するすべてのものに対して、愛情深く接していきたい。さらに、それを身近なところから伝えていくことによって、環境教育ネットワークを自分のまわりからも広げていきたいと思う。

自己を見つめ直す－豊かな人生を歩むために－

宮元 梨菜

<目次>

はじめに

第一章 自分らしさの喪失－現代社会が与えた影響－

第一節 物と情報の氾濫

第二節 浮遊・拡散する自己

第三節 自分探しの流行

第二章 影を見つめる

第一節 自己における影の問題

第二節 影の経験－星野富弘の例より－

第三節 影の承認と受容

第三章 自分らしく生きていくために－人生を歩む環境－

第一節 本当の自分とは

第二節 自分らしさとは

第三節 豊かな人生を歩む

おわりに

<要約>

自分らしさ、自分探し、本当の自分。近頃、こういった言葉をよく耳にする。これらの言葉は、現代のCMや歌詞、雑誌広告等の中に溢れ、今や一種のブームとなっている。

ここ数十年の科学技術の進歩により、現代を生きる私たちの生活は非常に豊かなものとなった。そして1980年代のバブル経済以降、日本の消費社会は「大量生産・大量消費」の時代から、「多品種少量生産・個性消費」の時代へとシフトしてきた。それに伴い、日本の社会は「物の豊かさ」を求める時代から、「心の豊かさ」を求める時代へと変化していった。

しかし、世の中に溢れる物や情報の中から、自分にとって本当に必要なもの、相応しいものを選び出すことは非常に困難である。「個性」や「自分らしさ」が過剰に求められる一方で、絶えず変化する世間の流行に知らぬ間に流され、私たちは自分自身を見失ってははいないだろうか。

第一章では、現代社会が与えた影響という視点から、現代の私たちが失ってしまっていると考えられている、「自分らしさ」について考えていきたい。第二章では、人間の誰しもがもっていると考えられる「影」の存在について考え、それを認めること、受け入れることの必要性を説いていく。そして第三章では、私たちが豊かな人生を歩んでいくためには今、何が必要なのか、そしてどのような生き方をすることが望ましいのか、考えていきたい。

確かに、「自分らしさ」を持つことは大切である。しかしこの「自分らしさ」という言葉は非常に曖昧さを帯びており、明確な定義付けは存在しない。「自分」という存在はこだわればこだわるほど、かえって見え辛くなってしまふものなのかもしれない。

自分らしい生き方。それは換言するならば、他者に流されない、自律的な生き方のことである。他の誰のものでもなく、自分自身の基準に従いながら生きていくことが今、求められているのではないだろうか。そしてその基準は、常に自らで創り上げていくものなのかもしれない。現在の自分の生き方に疑問を持ち、もっと豊かな人生を歩みたい、そう思えた時、それは同時に自己を見つめ直す機会ともなりうるのかもしれない。

「いのち」の尊厳をめぐるケアの可能性を考えるー

森 彩香

<目次>

はじめに

第一章 「いのち」を考える

第一節 医師の葛藤ー『ブラックジャック』からー

第二節 死を見つめるー『葉っぱのフレディ』からー

第三節 充実した生を生きるためにーターミナル・ケアの視点からー

第二章 医療をめぐる問題

第一節 医師と患者

第二節 生命の尊厳 (SOL) と生命の質 (QOL)

第三節 医療技術の進歩がもたらした生存の拡張

第三章 生と死を見つめ直すーこれからのケアのあり方ー

第一節 ケアすることの重要性

第二節 ケアする現場が抱える問題

第三節 いのちの教育

おわりに

<要約>

近年は延命技術や医療・科学技術の発達により、命を操作することが少なくとも可能になった。しかし私たちはどこかで命というものに対して軽薄になっていないだろうか。現在、医療技術は発展し続け、衛生面もかなり向上し、私たちのほとんどがその恩恵を得ている。しかしその高度な医療技術で延命効果は上げているが、病院で生活している人の質の向上や、いのちの尊厳はそれほど大切にはされていない。人間に生きる意義を感じられるようにするケアや治療はあまりなされていないのが現状である。長く生きることよりも、どれだけ人生に潤いや豊かさを持つことが出来たのかが終末期医療(ターミナル・ケア)には必要になってくるのではないかと。

これからの時代には、医療従事者のみが医療を考えるのではなく、住民も一緒にになって医療を変えていかなければならない。クオリティ・オブ・ライフ(QOL)の向上という共通の目標のために、みんなが集結していかなければならないのである。今後はケアの需要と供給がもっと増えていくだろう。また、様々な現場で求められているケアについても考えてきた。結局はいのちを軽薄に扱ったのではなく、誤ったやり方で大事にしすぎるがゆえに無意味な延命治療が横行してきたのであり、これは今後も議論を十分にしていける必要があるだろう。患者の意思に沿った、有意義な治療がなされることを期待したい。しかしどうしても医療科学では全ての患者を治すことに限界がみえてきた。次は医学の限界により、見放された患者に対して十分なケアを施し、患者のクオリティ・オブ・ライフの向上に、より力を注いでいかなければならない。「いのち」を質でとらえることで今後医療現場もどんどん変わっていくであろう。

また、これからはケアにより重点が置かれ、ケアを取り巻く現場や制度の改善がされることを期待したい。今後は自立を支援するケアを目指していくべきであろう。そうすることにより、介護者自身の生命の尊厳を保つことができ、ケアワーカーの過度な介入も防ぐことができる。

そして「いのち」の素晴らしさや有限性などを、なるべく幼いうちにたくさん経験してもらうことが一番望ましいであろう。生命を健全な状態で保つためには「生活」に密着したケアが必要であるといえる。また、自然という「いのち」の前では私たちはいかにちっぽけな存在であり、思い通りにいかないことがたくさんあることを実感させられる。そういうことを体験した子どもたちが大人になり、私たちが行き詰まっている問題に解決策を与えてくれることを願う。そのためには「いのち」の教育を行っていくことが一番効果的であるだろう。

動物園における環境教育の展開

山縣 亜梨沙

<目次>

第一章 動物園の変遷

- 第一節 動物園の歴史—第二次世界大戦を経て—
- 第二節 現在の動物園の現状—動物園反対派の存在—
- 第三節 環境教育について考える動物園—王子動物園の事例—

第二章 博物館としての動物園の意義

- 第一節 動物園の意義
- 第二節 生物多様性と稀少種について
- 第三節 種の保存と繁殖

第三章 動物園における環境教育の実践

- 第一節 五感を通じた学習—他の動物と共生するために—
- 第二節 学校・地域との連携
- 第三節 動物園における環境教育—生命にふれる—



カバ舎にて食事中的の出目男



カバ舎内のプールで大きく口を開ける出目男



ミルクを飲むモモコ



レッサーパンダの太郎

<要約>

私は2008年の夏、神戸市立王子動物園に学芸員実習生として受け入れていただいた。私はこの実習で、一生に一度の体験をした。様々な動物に触れ、観察することにより、新たな発見をしたり知識を身につけたり、何よりも感動することがたくさんあった。私は学芸員実習を通して、生命の温かさに触れ、生命の大切さや感動の体験を心に刻んだ。この実習を経験し、動物園は生命を扱う博物館だからこそ、生命を見つめ直すチャンスがあると強く考えるようになった。

今日、テレビから流れてくるニュースや新聞を見ると、多くの悲惨な事件が起きている。最近では元厚生次官連続殺人事件、大麻に関する事件、少し前には秋葉原で起きた無差別殺人事件などが起きている。これらは大げさな例えと思われるかもしれないが、実際に私たちが暮らしている社会で起こっているものだ。また、罪を犯した人だけではなく、現代の、特に若者に多い「キレル」、「ムカツク」などという言葉は、現代人の心の疲れや、心の環境が汚染されていることを示しているのではないだろうか。渇いた心を潤すには、また、心を豊かにするには何をすればよいのだろうか。

この論文の内容には王子動物園での学芸員実習の経験を生かそうと考え、私自身の体験を多く含めた。なぜならば実習期間中、私自身が「環境教育を受けた」と言えるからである。実習は心を豊かにするための、豊かな経験として私の心に刻まれている。そして環境教育の必要性について改めて考えるようになった。そして単なる思い出で終わらせないためにも、私自身にとって論文を書くことは必要であった。私は様々な角度から動物たちに触れ、学び、感じたことで、とても暖かい気持ちになれた。手で触らなくとも伝わってくる生命の温もりをたくさんの人に感じてほしい。動物園で行われるイベントの対象は子供のケースが多い。しかし、高齢者の方であっても、大学生であっても、小さな子供であっても、動物の生命に触れることで感じるものは、それぞれあるのではないだろうか。動物園はたくさんの動物の生命をもって私たちにさまざまなことを訴えかけている。動物が抱く感情や危機を動物たち自身が人間の言葉によって表現し、意思疎通をすることは難しいが、動物たちの生命に触れ、感じ取り、その訴えに答えていかなくてはならない。また、動物園は動物たちの声を代弁し、伝えていくべきであろう。そして受け取る側も、感じたものを素直に受け入れることで、心を豊かにしていけると考えられる。

また、動物園に対する反対意見について、初めはとてもネガティブな意見に感じたが、裏を返せば、より良くするためのヒントと捉えられるだろう。反対

する理由一つ一つが現在抱えている問題であり、動物園にとって解決していくべき課題であるだろう。

動物園はたくさんの動物の生命と、私たちの生命が出会える場であり、心に潤いを与えてくれる空間である。さらには動物園だけにとどまらず、自然に生きる野生生物や自然環境についても考える動きが強まってきている。地球上に存在するたくさんの生命を守るために、動物園はこれからもたくさんの情報を発信し、守り、育てていくことができるであろう。